



「癒し効果もある 和牛繁殖経営」



肉用牛経営：

新発田市大字西名柄 渡辺 喜夫氏

私の住む新発田市は、稲の単作地帯です。我が家は稲作の兼業農家で堆肥取りのため3～4頭の母豚を飼育し、子豚を出荷する程度の畜産も営んでいました。

私は学生時代、卒業したら養豚経営の規模拡大して、自立できる専業農家を目指しておりました。学校では豚の育種や繁殖についてを学び、春休みや夏休みの多くは千葉県や群馬県の先進地の養豚場に実習へも行かせて頂いておりました。そして畜舎の造りやふん尿処理なども、実際に自分が養豚経営する時はこうしようとかいろいろと参考にしたものでした。大学の斡旋で、卒業後は1年間アメリカ中西部の養豚と肉牛の大規模農家で研修しました。そこで、畜産技術以上に精神的に大きな影響を受けたように思います。経営についても客観的に一歩引いて再認識する事の大切さ、適正な規模拡大、立地環境と将来性など、自問自答しながら帰国後の農業経営のスタイルを模索していました。

昭和56年の春、帰国後早々、我が家の田植え作業から私の専業農家としての仕事がスタートしました。当時の水田面積は2.2ha程度でしたので、稲作だけでは専業農家として経営が成り立ちません。やっぱり畜産を取り入れた複合経営だと思い、翌年の夏、後継者育成資金を借り入れ無理をしない程度の(金銭的、技術的に)牛舎を新築しました。養豚でなくホルス雌の35頭規模の肥育牛経営を取り入れました。アメリカで培ってきた肉牛の経験もありましたが、我が家の回りには野草が豊富で、稲ワラも牛の方が自給飼料として有効利用できる事、日本では牛肉の消費も、販売単価も上がってきておりました。輸入自由化のニュースもありましたが、海外の肉質は日本のそれとは違う、大丈夫と確信しておりました。その後、F1の肥育、和牛肥育を経て、今では和牛繁殖経営を母牛11頭で1年1産以上を目指しております。思えば、養豚の基礎的な勉強と経験が少なからず役立っている気がします。現在は6.5haと転作大豆、アスパラガス栽培などを組み合わせた複合経営を行っています。母牛が私の顔を眺めながら、

「地域の一員としての 酪農経営」



酪農経営：

妙高村大字関山 笹川 一郎氏

私の住む妙高村は、自然がいっぱいで冬は少し雪が多く降りますが、夏は涼しく牛の生理にととても合っています。私は、この地域で行われる「ふるさと体験協議会」に入って3年になります。五月の連休でのイベントではバター作りを担当して生乳からバターを自分の力で作ってパンにつけて食べてもらい、新鮮でクリーミーな味を楽しんでもらっています。同時に子牛を連れてきて子供達に触れてもらい体の温かさと毛の柔らかさを実感してもらっています。子供達の中には帰る時に子牛に「バイバイ」して、また来るねと言って車で帰っていく子もいます。生きてる物の温かさと食物への思いを持ってくれたことが私には非常に嬉しく思いました。又8月の第1土曜日にはジャガイモ掘りとトウモロコシのもぎ取りを行っています。北陸から上越一円の家が400人ほど集まり、土まみれになってジャガイモを探して、大きなイモが沢山出てくると子供は長靴が汚れるのもかまわず、喜んで畑を掘り起こしてビニール袋にいっぱいのジャガイモを重そうに持って行く姿は満足そのものでした。

今、食についての安全、安心を消費者と生産者がお互いに現場に一緒に立って話し合いをしたり、一緒に作業して食の大切さと生きている物の温かみを酪農を通して、触れ合うことは良い事と思うし、酪農家が減ってきて地域の一員で必要な酪農で在りたいと思うのです。

草を反芻する為に顎をゆっくり回すように動かしているその側で、子牛が乳を探している光景など見るたびに、せっかちな私はのんびりと癒される思いがします。家庭内では高校生を頭に6人の子供達の学費や生活費は年々右肩上がりで低コストがなかなか図れません。所得倍増計画とは行かないまでも、ゆとりある経営、そして自分に、地域で一番合った農業経営の実践をこの先も続けて行けるよう頑張りたいと思います。